

【翻訳続き】

ジョン・ミルトン著
アレオパジティカ
(その3)

稲用 茂夫訳 (教育福祉科学部)

[訳文] [¶15]

これが聖職者たちに及ぼす影響も決して感心したものではない。豊かな教会禄で報酬を受け、榮譽の極みにある教区牧師が、研究心を奮い起こさせるようなものが他に何もない時、英語の聖書索引と備忘録とまじめな学士程度の学殖と、対照福音書や引用句集などを巡り歩くことで手抜きをしたり、ありふれた教義題目とそれに合う用途、動機、特徴、方法などを付けてそれを繰り返す生活になるのも、決して今に始まったことではないのである。というのは、アルファベットや音階などと等しく、それらをいろいろとこね回したり、変えたり、継いだり、離したりすれば、聖書の注釈書や祈祷日課書や平信徒用祈祷集や、その他怠け者向きの小道具のお世話にならなくとも、わずかの学識と2時間くらいの瞑想とで、週1回分以上の説教を仕上げる準備が整うからである。

それほどむつかしくもないあらゆる聖句について、たくさんの説教がすでに印刷され、積み重ねられているが、それはロンドンで商売を営んでいる聖トマス教会や、はては聖マーティン教会、聖ヒュウ教会に至るまで、その教区の境内ではあらゆる商品のうちで売れ行きが良いのである。だから牧師たちは自分の倉庫を十分満たす手段があるので、説教壇で準備が足りなくても少しも心配しないであろう。しかし、側面と背面の両面に柵をめぐらされていなければ、裏口の戸が峻厳な検閲官に守られていなければ、奔放な書物がときおり飛び込んできて、塹壕の中の昔から積み重ねてある蔵書に襲いかかるということであれば、その人はいつも眼を覚まし、寝ずの番をし、自分の信じ込んでいる通説の周囲に立派な見張り番を配置し、仲間の検査官とともに右からも左からも巡回して回り、自分の会衆が誘惑されないようにしなければならぬ。その会衆もそうなれば、さらに教化され、訓練され、鍛錬されるわけであろう。それで、それほど警戒に骨を折らねばならないのだが、願わくばその苦勞を恐れて、かえって教会検閲制度を実施して怠けていたいと思う、などのないようにしたいものである。

[¶16]

というのは、もし我々が正しいということを確認しており、見苦しくもおどおどした態度で真理を奉ずるのでなければ、またもしも我々自身の教えを薄弱であるとしてみずから卑下することなく、民衆を無教育かつ無信仰な連中として非難するのでなければ、おそらく我々に知識を授けてくれた人々に劣らぬ思慮と学識と良心をもつ人が、家から家へそこそこ説いて回るようなあぶない芸当をせずに、堂々とペンを取って自分の意見なり論理なりを、またなぜ今考えられていることが健全ではないのか、ということを書き出して発表したほうが、はるかに公正なことではないのだろうか。キリストは、公然と人前で説

教したことを自己の正しさを弁護する手段であるとして主張した（ヨハネによる福音書，18：19-21）。しかも，書いたほうが，説教することよりも公開的である。そして必要ならばいっそう論駁しやすいものである。というのは，真理の戦士であることをもって唯一の天職と考えている人間はたくさんいるのであるから。もしかれらがこれを等閑に附するようなことがあったら，それはかれらの怠惰と無能に帰するほかないことになるではないか。

[¶17]

これほどまで，我々はこの検閲という方法のために，我々のおぼろげな知識を真の知識にすることをばまれ，かつそういう習慣から遠ざけられてしまうのだ。もしも検閲官がその役目を立派に遂行しようとしたら，他のいかなる世俗の職業にもまして，その人自身の牧師という天職がどれほど傷つけられ，さまたげられることになるであろうか。したがって，二つの義務のうち，どちらか一方をおろそかにしなければならないが，それをいかに決定するかは個人の問題であるから，私がとやかく論ずることはやめて，その人自身の良心にまかせておこうと思う。

[¶18]

私が暴露したいと思っていたことは，まだ残っている。それはこの検閲の企みが我々に与える信じられないほどの被害損失である。それは海上の敵が我々のすべての港や湾を封鎖してしまうこと以上に，この検閲が我々の最も高価な商品である真理の輸入をさまたげ，遅らせるということである。いや，むしろこの検閲は，可能ならば宗教改革の光を消し去り，虚偽を打ち立てようとするために，反キリスト教的な敵意と策略によって，故意に始められ，実行されるようになったもので，それはトルコ人が出版を禁止することによって，コーランの聖典を維持しているあの政策とほとんど変わりがないのだ。特に我々と，ローマ教皇そしてそのそばについている監督たちとの主要な論争点において，我々の側に大きな真理があることについては，我々はたいていの他の国民よりも声高に神に感謝と祈りを捧げなければならないことを否定するどころか，喜んで告白する。しかし，我々がもうそろそろこの地点で天幕を張ってとどまったほうがよいであろうとか，あるいは，我々が見つめる人生の鏡が映し出してくれる宗教改革の最高の見通しを我々が達成し，至福直観を得るまでに至ったなどと考える人があったとしたら，そのこと自体が，すでにその人は真理からは未だほど遠いことを示している。

[¶19]

真理はまさしく主イエス・キリストとともに，かつてこの世に来て，栄光に満ち満ちて完全無欠な姿をしていた。しかし，主が昇天され，その使徒たちがまた主の後を追って永遠の眠りにつくやいなや，邪悪な欺瞞者の一群が起こり，それはあたかもエジプトの悪の神テュポーン（Typhon）が共謀者たちとともに善良な神オシリス（Osiris）を殺した，あの物語のように真理の女神をとらえてその美しい肢体を千ほどにもばらばらに切り刻み，四方の風に乗せてまき散らしてしまったのである。このとき以来，悲痛にも真理の味方として立ち上がった人たちは，オシリスの切り刻まれた身体を心を痛めて探しまわった妻のイシス（Isis）にならって，真理の女神の手足を一つひとつ見つけ次第集めてまわったの

である。両院議員の諸君、我々は今だにそれら全部を見つけ出してはいないのである。また再び主が来たり給う再臨までは、全部を見つけ出すことはないであろう。ほかならぬ主が、関節や手足を全部つなぎ合わせて美と完全の不滅の姿に作り上げ給うのである。今もなお探求を続け、我々が殉教の聖者の切り裂かれた肢体に敬意を示し、捧げつづける人々を、検閲官の禁令がいたるところに立ちふさがって止めたり、さまたげたりするのは、断じて許すべからざることなのである。

我々は我々の（目の）光を誇りとする。しかし、太陽そのものも見方を誤れば、我々は衝撃を受けて眼がくらんでしまう。太陽に近づいてしばしば見えなくなる遊星や、太陽とともに出沒する最も光の強い恒星も、それらの天体の反対運動のために夕方や明け方に天空に現れるにいたるまでは、誰がこれを認めることができるであろうか。我々が獲得した光は、それを絶えず見つめるためでなく、むしろ我々の知識から遠く離れたものを発見するために与えられたものである。牧師の衣を脱がせたり、（司教の）冠を奪ったり、長老教会の肩から長老職を取り去ったとしても、それで我々が幸福な国民になれるというものではない。いや、教会においての、あるいはまた家庭生活や政治生活の規則に関する、同様に重要な他のことがらを吟味し、改革しない限り、ツヴィングリ（1484-1531）やカルヴァン（1509-1654）が我々に向かって打ち上げてくれたのろしの炎をあまりに長時間見つめ過ぎて、我々が全くの盲目になったというほかないのである。

宗派や分派のことを始終ぶつぶつ言い、誰かが自分の生き方に異議をとなえと、それをたいへんな災厄と思う人がいる。騒乱の元になるのは実は、素直に聞こうともせず、また他人を信服させることもできないくせに、かれらに特有の体系にないものはすべて押さえつけてしまわなければならぬと考えている人々の傲慢と無知なのである。真理の手足にまだ欠けていて、離ればなれになっている断片を無視し、他人がこれを結合するのを許さない人々こそ、騒乱者であり、統一の破壊者である。我々が知っていることを土台にして、知らないことを探求し続けること、見つけ次第、真理を真理へと結合してゆくことは（その真理の手足は同質で釣り合いが取れているがゆえに）、まさに算術におけるのと同様、神学においても黄金律というべきであり、教会においても、たぐいなき調和を作り上げるものであって、決して冷淡で無関心でしかも内心では意見を異にする人々を、強いて外側から結合しようとするものではないのである。

[¶ 20]

イングランドの両院議員の諸君、皆さんがその一員であり、皆さんがその統治者である我が国民は、いかなる国民であるかを考えてみられよ。それはのろまでもなく、ぼんやりでもなく、俊敏で誠実で、透徹した精神の持ち主であり、発明の才が鋭く、論じては微をうがってたくましく、人間の能力が天駆けり得る最高点にまで必ず達し得る国民なのである。それゆえ最も深遠なもろもろの科学における学問研究も、我が国では極めて歴史が古く、かつ卓越しているので、由緒正しく判断力も極めて優れている作家たちの信じているところによれば、ピュタゴラス学派やペルシアの賢人たちさえも、この島国の古代の哲学にその源を発しているというほどである。かつてローマ帝国の皇帝に代わってこの地を支配したことのある賢明で礼節あるローマ人ユリウス・アグリコラ（A. D. 37-93）は、フランス人の苦心の研究よりもイングランド人のありのままの才智のほうがまさっていると

述べた。また、あのまじめでつましいトランシルヴァニア大公が、毎年ロシアの山の僻地から、はるばるヘルキュニアの荒野を越えて、我が国の言葉と神学を学ばせるために、若者ではなく堅実な大人を派遣してくるのも故なしとしないのである。

なによりもまず、神の恵みと愛が我が国民に対してとくに広大無辺であると考えべき大いなる理由がある。そうでなければどうして我が国民がとくに選ばれて、あたかもシオンの山の上からのように、我々のイングランドの中から全ヨーロッパに向かって宗教改革の最初ののろしを上げ、その最初のラッパを高らかに鳴り響かせたのか。もし仮に、あのしぶといいじわるな監督たちが、神のごとくすばらしいウィクリフの精神に対して、分裂と革新を理由にして弾圧を加えなかったならば、ボヘミアのフス (ca. 1373-1415) や (プラハの) ヒエロニムス (ca. 1365-1416) も、さらにルターやカルヴァンの名前さえも、人々に知られることはおそらくなかったであろうし、近隣諸国の宗教改革を成し遂げた栄光は完全に我々イングランド人のものであったろう。ところが我が国の牧師たちは暴力をもってこの事件を処理してしまったため、神が我々を教師にしようとなされたその思し召しに反して、我々は現在最も遅れた劣等生に成り下がってしまっているのである。

ところで、すべての兆候が一致している点から考え、また徳が高く、敬虔な人々すべてが毎日その考えを披瀝しているごとく、かれら一般の直覚力によって判断すれば、今や再び、神はみずからの教会に偉大な新時代を画し、宗教改革の改革さえも命じ給うているのである。それも、神みずからその下僕に神意を啓示し給うているではないか。しかも例によって、まずその愛し給うイングランド人に。あえて私は言う「例によって、まず我々に」と。たとえ我々が、神の助言の手段をわきまえず、またそれを受けるに値しない者であろうとも、である。この広大な都市を見られよ。神のご加護の豊かな逃れの町 (民数記 35: 11) を。自由の隠れ家を。そこでは兵器工場が包囲された真理を守る正義の刃を鍛えるために数多くの金床やハンマーを動かしている。その数にも増して、多くの作家たちが、研鑽の灯火によって、あたかも忠節の誠を尽くすがごとく、来るべき宗教改革に備えて新しい見解や思想を熟慮し、探求し、思索している。一方で他の人々は、自分もまたと書かれたものをすべて読みかつ吟味して、道理と説得の力に従いつつある。

これほどにも従順で謙虚に知識を追い求める国民に、これ以上何を要求できようか。知識豊かな国民、預言者、賢者、そして価値ある国民を作るには、この有望で豊穡な土地に、賢明で誠実な労働者以外にいったい何が必要であろうか。我々は刈り入れ時までまだ五ヶ月以上ある。しかし、実は五週間でよいのだ。眼を挙げて見さえすれば、畑はすでに色づいているのではないか (ヨハネによる福音書 4: 35)。多く学ぼうと望めば必ず多くの議論、多くの著作、多くの意見が現れるものである。それは、善良な人々の意見は、まだできかけの知識に過ぎないからなのだ。宗派や分派に対するとりよめのない恐怖のために、我々は神がこの都市に起こし給うた知識と理解へのひたむきな渴望をそこねている。一部の人々の嘆くことがらは、我々にとってかえって歓迎すべきことがらであり、評判の悪くなったキリスト教への関心を、再び自分たちの手に取り戻そうとする人々の敬虔な努力は、むしろ賞讃すべきものである。自由な良心とキリスト教的自由をやかましい規則の中にむりやり押し込めてしまうという監督式のしきたりさえ捨て去ることができたら、わずかの寛大な思慮と、お互いのわずかな我慢と、一握りの思いやりをもって、これらすべての努力は結合統一され、皆で手を組んで真理を追求することができるようになるであろう。仮

に、国民の性格や気質とその制御方法を十分洞察できる偉大なすぐれた外国人が我が国にやって来て、真理と自由を追求する高邁な希望と目的、そして広大な思想と推論の飽くなきたくましさを観察したならば、その人は、あの（ローマを征服したエピルス国王）ピルルス（Pyrrhus, ca. 318-272 B. C.）がローマ人の従順と勇気を称えて叫んだように、きっと「もし我がエピルス人がこのようであったら、私は教会と王国とを幸福にするために、どんな立派な計画をも敢えて企てるであろう」と、叫ぶに違いない。

しかも、これらの人々が教会分裂派だとか、独立派だとかいって非難されているのである。それはあたかも、主の神殿を建設するにあたり、ある者はそれを四角にし、他の者は杉の木を切り倒しているのに、一方では道理のわからない者がいて、神殿が出来上がるまでは石切り場や材木にいろいろな分離や分割が必要であるということがどうしても納得いかずにいるのと同じようなものである。一つ一つの石を巧みに並べても、それだけでは全体が渾然一体となることはできず、石が隣り合って置いてあるだけである。また、建築物のあらゆる部分が同じ形であるということもあり得ない。むしろ、建物が完全無欠であるためには、はなはだしく不釣り合いではない数多くの適度な変化と緊密な対照とから、すべての構成物を引き立たせる美しい優雅な調和（シンメトリー）が生まれるのでなければならぬ。

偉大な改革がまさに行なわれようとしている現在、我々は精神的な建築においても、さらに思慮深い賢明な建設者になろうではないか。それというのも、今や偉大な預言者モーセが天に座して、あの記憶すべき栄光に満ちた願いが成就して、我が国の七十人の長老たちだけでなく、主の民すべてが預言者となったのを見て喜ぶ、という時が到来したように思われるからである。（民数記 11：24-29）しかし、この時に当たって幾人かが、そしてまたおそらく善良な、しかし当時のヨシュアのような未熟な連中が、ねたみ心を起こすのも無理はない。かれらはこのような分裂や再分裂で、我々が墮落しないだろうかといらいらし、自分自身の弱さから苦悶しているのである。そこで我々の敵（ローマ・カトリック教会）は再び喝采して時を待ち、そして言う、「かれらが分裂しつくして、小さな党派に分かれてしまったその暁こそ我らの時なのである。」と。愚か者よ、我々は枝葉に分かれてはいても、大本には確固たる根があるのだ。かれらにはそれが見えない。我々の小さく分かれた中隊が、そいつの率いる統一のないかさばった一団に、あらゆる角度から切り込んで行くのを見るまでは、やつはそれに気がつかないのである。そして我々が、これらの宗派の分裂とされていたものについてより良い期待を持つべきであること、またこれについていらいらしている人々の、あまりに臆病な、しかしおそらく正直な懸念を、我々は問題にする必要がないこと、我々の仲違いに対して悪意のある喝采を送る人々を、最後には我々が笑って見返すであろうこと、以上のことを私は次の理由から確信している。

[¶ 21]

第一には、一つの都市がいわば包囲され、航行し得る河川が荒らされ、侵略軍が押し寄せ、挑戦と戦闘のうわさが城壁や郊外の塹壕にまで迫って来た時に、すべての国民、あるいはその大部分が、平生にも増して改革すべき最高最大の問題の研究と取り組み、今まで論じられたり書かれたりしたことの無いことがらを、かつて見ないほどみごとに論議し、究明し、読書し、考案し、論述しつつある、というようなことは、両院議員諸君よ、第一

番目に、皆さんの周到な先見の明と、確固たる統治に対するひたむきな好意、満足、信頼を示すものにほかならない。ここからしてまさに、凛々しい勇気と国民の敵に対する十分に根拠のある侮蔑とが生ずるのである。それはあたかも、ローマがほとんどハンニバルから包囲された時、その町の中にとどまりながらハンニバルがその軍隊を駐屯させている土地を安くはない値段で買い取った男のような、偉大なる精神が、少なからず我々の中にも存在することを示すようなものである。

第二に、それは我々の幸運な成功と勝利とを物語る、生き生きとした喜ばしい前兆である。それは例えば身体について見るならば、血液が清純であり、生活力に対してだけでなく、理性的能力に対しても活力が純粋旺盛であり、かつ理性的能力が最も鋭敏活発な機智洞察の働きをもっている時は、身体がきわめて好調、かつ優れた体質をもっていることを示しているのである。それと同じで、国民がきわめて快活陽気であり、その快活さをもって、国民みずからの自由と安全とを守るだけでなく、論争と着想の最も堅実崇高な点にまで惜しみなくこの快活さが及ぼされるならば、それは国民が退化したり、あるいはくじけてしまって致命的な滅亡へと急いでいることを示すのではなく、古いしわだらけの腐った皮を脱ぎ捨て、その苦しみを克服して若返り、真理と栄える徳との輝かしい道に踏み入り、この末期の時代に、偉大かつ光栄のある役割を果たす運命を我々が担っていることを示しているのである。高貴にして力強い国民が、眠りから覚めた強者のごとく立ち、不敗の頭髪を打ち振っている姿を、私は心に思い描くのだ。また、国民が驚のごとくに羽返しをしてたくましい若さをよみがえらせ、真昼の光線に向かってたじろがない両眼を輝かし、長い間痛めつけられていた視線を、天上の光の泉そのものによって洗い落とし、清められているのに、他方で臆病な小鳥たちが群がって、薄暗がりをおぼろげなフクロウなどとともに、どうなることかとあわてふためいて羽をばたばたさせて、嫉妬のあまり宗派分派一カ年の予想をうるさくさえざり立てているありさまを、私は目の当たりに見るのだ。

[¶ 22]

では、皆さんはどうしたらよいのか。この都市で芽生え、日ごとに芽生えつつある知識と新しい光との花の作物を、すべて踏みこたえてしまうほうがよいのか。二十人の買い占め人にその中で寡頭政治をやらせ、再び我々の心を飢えさせ、連中の枘で計測したもの以外は、国民は何も知らないままにいたほうがよいのか。両院議員の諸君よ、皆さんにこのような圧迫を勧告する者がいたら、それは皆さんみずからを圧迫するように皆さんに命じているのも同然であるということを感じていただきたいのだ。次に私はこれについて述べよう。

もしもこのように何でも自由に書き、かつ話す直接の原因を知りたいと願うならば、これは諸君自身の穩健、自由、人道的な政治以上に真の原因をあげることはできない。両院の議員諸君よ、それは皆さん自身の勇気ある適切な思慮が我々にあがってくれた自由であり、あらゆる偉大な知能の母体である自由である。それはあたかも、天の感応力のごとく我々の精神を浄化し、啓発してくれた自由であり、我々の理解力を遙かにその能力以上にまで解放、拡大、高揚させてくれた自由なのである。今や我々を今日あらしめてくれた議員の皆さんが、まず自由の愛好者の建設者でなくなることをのぞかない限り、皆さんは我々をより無能力に、より無知に、真理の追究においてより不熱心にするにはできないのであ

る。我々は昔の我々のように、再び無知になり、また愚鈍に、形式的に、奴隸的になることもできる。しかしそのためには、まず議員の皆さんが、我々を皆さんによって解放していただくまで束縛していたあの連中のように、抑圧的、専横的、暴君的にならなければならないのではあるが、それは皆さんが決してなり得ないところである。我々は以前よりも余裕のある心と高められた思想とをもって、最も偉大で最も厳正なことがらを探求し、かつこれを期待することができるが、これも皆さんが我々の中に植え付けてくれた徳の成果であるのだ。皆さんは決してこれを抑圧することはできない。ただし、父親は自分の子を勝手に成敗してもよいという、今では廃止されているあの無慈悲な法律を再び実施するようになれば話は別である。その時には、誰が議員諸君の味方にしっかりとついて、人々を奮い立たせるであろうか。それは決して、軍隊のための被服税や輸送税、あるいは4ノールばかりの海防税に反対して武器を取る人ではない。私は正当な免税を闘い取らなければならないけれども、ただそれだけのことであるならば、私は私の平和をより愛するものである。いかなる自由にもまして知る自由を、発言する自由を、良心に従って思いのままに議論する自由を我々に与えよ。

[¶ 23]

意見が新しいとか、あるいは一般に認められているところと合わないからという理由でこれを抑圧することは、このように極めて有害かつ不公平なことであるとすれば、一体どうするのが一番よいのか。それは私の口出しするべきことがらではないと思う。ただ私は、皆さんの光榮ある構成員の1人である、真に高潔で敬虔な一上院議員から学び得たことを繰り返すにとどめる。その人が、生命と財産とを教会と国家に捧げつくしてしまわなかったならば、今やこの議論を立派に、疑いもなく擁護してくれたであろうものを、今はその亡きことを嘆き悲しむほかはない。皆さんは彼のことをご存知のはずである。しかも私は、彼の不滅であるべき名譽のため、その名前を言おうと思う。その人の名前はブルック卿 (Lord Brooke, 1608-1643) である。彼は監督制度についてペンを執り、ついで宗派分派について論じ、皆さんに切なる願いを、いやむしろ今となつては、臨終に当たつての最後の言葉を残された。私の見るところでは、それは皆さんに対する永久に優しく、立派な思いやりとなつて残るであろう。それは謙譲といきいきとした慈愛とに満ちあふれており、愛と平安とをその使徒たちに伝えられた主の遺言 (ヨハネによる福音書 14: 15-31) のほかには、これほどやさしく平和な言葉を読んだことも聞いたことも思い出せないほどである。彼はその中で、どんなに罵られようとも良心の最上の導きにしがたがって、神の教えを奉じ、純粹に生きて行こうとしている人々の言っていることを、忍耐強く、謙虚な気持で聞くように我々に勧告している。そしてたといそれが我々の意見と若干の食い違いがあつても、寛大に扱うようにと進めているのである。さらに詳しいことは、彼が公にして国会に捧げたこの書物自体が十分に語ってくれるであろう。彼が世に残した忠告は、その生涯とその死とのゆえに、十分に熟読する価値のあるものである。

[¶ 24]

そして特に今こそは、物議をかもしている当面の問題をさらに突っ込んで論議するのに役立つようなことを思いのままに書いたり話したりすることが許されるべき時である。前

後両面の顔をもつヤーヌス（Janus）の神殿の扉が開かれて戦闘開始となることも、今や無意味ではないであろう。たとえあらゆる教義の嵐が地上に吹き荒れてしまうにまかせてあるにせよ、真理の女神が戦場に出ている限り、その力に疑惑の眼を向けて検閲や弾圧をもって臨むのは不当である。真理と誤謬を組み打ちさせよ。この二つが自由に公然と闘った時、真理のほうに分がなかったことなどかつてあったであろうか。真理の行なう論駁こそ、最善にして最も確実な抑制である。光明と、より明らかな知識とが、我々の中に送り込まれるようにとの祈りの声を聞く人は、すでに構成組織されて我々の手に渡っているジュネーヴの戒律以外になお設定するべきことがあると思ひ至るであろう。

しかし、我々の待望している新しい光が我々の上に差し込む時、まず自分たちの窓から差し込まないからと、ねたんだり反対したりする人がいる。我々があの賢人（ソロモン）から「朝も夜も精を出し、隠れた宝を求めするように、知識を追い求めよ。」（箴言 2:4-5）と勧められているのに、他方では別の規則があって、法律による以外何も知ってはいけないと命令しているというのは、何という悪巧みであろうか。人が知識の深い鉱山で汗みどろになって働いて発掘したものに装備をほどこし、その理論をいわば軍隊として戦列に引き出し、行く手の邪魔物をことごとく撃破して敵を平原におびき出して、議論づくで問題を解決させようと思えばこそ、相手の望みとあらば追い風と太陽とを背にした有利な態勢までも敵に与えてやっているのに、しかもその敵がこそこそと忍び歩き、伏兵を設け、相手を通る場所に検閲という幅の狭い橋を作って守るというのは、軍人のやり方としては確かに勇ましいことかもしれないが、真理の戦いにおいてはどうみても卑怯かつ臆病な振る舞いである。というのは、万人の知るように、真理は全能の神に次いで強いからである。真理が勝利を得るためには、政策、戦略、検閲も必要ではない。それらは誤謬が真理の力に対して用いる計略であり、防衛手段である。真理にただその場所を与えよ。そして真理が眠っている間にこれを縛ってはならない。というのは、そんなことをすれば真理は真実を語らないからである。かの年老いたプロテウスは、捕われ、縛られて初めて信託を語ったといわれるが、それとは異なるのだ。その場合、真理はむしろ、自分以外の千変万化の姿をとり、預言者ミカヤがアハブ王の前でやったように（列王記上 22:1-36）、自分の本身に立ち返ることを誓わせられるまでは、あれこれと時代に応じて声の調子を変えて行くであろう。

しかし、真理が一つ以上の形をもっているということはあることではない。そうでなければ、真理がこちら側にあっても、あちら側にあっても、本来の姿を失わないという、いわばどっちつかずの種類のことならばどうなるだろうか。また、かの（ユダヤ教の）規則を廃止したり、その証書を十字架に釘で打ち付けてみたところで（コロサイの信徒への手紙 2:14）、それは空しい影にすぎないではないか。また、聖パウロがしばしば自慢したキリスト教徒の自由は、はたしてどれだけの収穫であったろうか。聖パウロの教えによれば、食う者も食わない者も、一日を重んずる者も重んじない者も、主のためにどちらを選んでもよいのである（ローマの信徒への手紙 14:5-8）。我々が愛さえもっていたら、そしてお互いに裁き合うということが我々の偽善の最後の砦になっているのであれば、どんなに多くの他のことがらが、平和のうちに寛容になされ、そして良心にゆだねられることであろうか。しかも私が恐れるのは、表面的な一致というこの鉄のくびきが我々の首に奴隷の烙印を残してはいないか、（カトリック教会や監督教会で用いた）リネ

ンの衣の亡霊が、いまだ我々につきまとっているのではないか、ということである。眼に見える教会の会衆がお互いに少しでも分裂したりすると、それが根本的な問題でなくとも、もう我々はとまどい、我慢できなくなってしまう。一方、眼に見えない真理の抑圧は積極的にやり、これに反して習慣の奴隷となった真理をその束縛から救い出すことには乗り気でないために、我々は真理と真理とを引き離してしまっただけで平気であるけれども、これこそ実は何よりもひどい分裂であり、分離なのである。我々が今なおこちこちで上っ面の形式主義にしがみついている間に、またしてもひどい画一的な愚劣さに陥るかも知れず、またさらに「木と草とわら」（コリントの信徒への手紙 3：12）を一緒くたに押しえつけ凍らせたこちこちの塊みたいになってしまうかもしれないが、これは小分派がさらに多くの派に分かれることよりは、はるかに急速に教会を墮落させる結果となることに我々は気づいていないのである。

そうであるからといって、私があるゆる小さな分裂についてよく思っているというわけではなく、また教会にあるものはすべて金、銀、宝石であると期待してよいということでもない。麦と毒麦を分けること（マタイによる福音書 13：24-43）、よい魚と雑魚を分けることは、所詮できないことである。それはこの世のすべてが終わった後の天使の役目でなければならぬ。しかしもし、すべての人の心が同じでありえないならば—そのようには誰も考えはしないだろうが一何もかも強制してしまうというよりは、むしろ多くを寛容に見てやるということのほうが、はるかに健全、慎重、キリスト教的であることは疑いを入れない。だからといって、私は（カトリック教会の）教皇制を寛容に見たり、迷信を公然と認めよということではない。第一に、もしそれがあらゆる慈善慈悲の手段を用いて、弱き者、迷える者を獲得し、奪還するようであったならば、これはあらゆる宗教と市民の至上権を絶滅させるものであるから、それ自体をたたきつぶす必要がある。信仰に対しても、良俗に対しても、絶対的に不敬かつ有害なものは、法律がみずからを曲げようとしないう限り、いかなる法律をもってしても断じてこれを許すことはできないのである。しかし、寛容と私が言っているのはそんなことではなく、教義上あるいは規律上のある点で近接した差異、あるいはむしろ似たり寄ったりのことであり、これらはたとえ数が多くあつたにしても、我々がお互いの平和のきずなをしっかりと保ってさえおれば、御霊による一致（エフェソの信徒への手紙 4：3）を阻害することはないのである。

そういつている間にも誰かがペンを執って、我々がそのために苦闘している遅々たる宗教改革の事業に救いの手を差し伸べてくれたなら、また真理が他の誰よりも先にその人に話しかけたとしたら、あるいは少なくとも話しかけたような気がしたとしたら、その場合我々がその人に対して、イエズス会修道士並みに、そんな立派なことをするにも許可を請わねばならないといって、その人を悩ませる必要がどこにあるだろうか。そしていよいよ禁止するという段階になれば、真理そのものほど禁止しやすいものはないという事実には思い至らないだろうか。真理というものは、偏見と慣習のために朦朧となった我々の眼から見ると、あたかも多くの偉人たちが、一見お粗末で軽蔑すべき人物に見えるのと同様に多くの誤謬よりは見苦しく、まやかしものみたくに見えるものである。自分の気に入った人々のほか、誰の言うことも聞くものではないといふかれらの意見こそ、あらゆる意見のうちで最悪かつ最新であつて、そのために宗派や分派がちまたにあふれ、真の知識を求めようにも求められない有様だといふのに、かれらが新しい意見がどうのこうのといつて空

騒ぎをしているのはなんということか。おまけに、もっと大きな危険がその中に潜んでいるのだ。

というのは、神が強力かつ健全な激震で王国を揺り動かして（ハガイ書 2：6-7，ヨエル書 3：16），すべてにわたる改革を進められる時，多くの異なる宗派やインチキ教師たちがやっきとなって誘惑しようとするのはわかりきったことであるからだ。しかし，その時には，神はすぐれた才能と人並み以上の勤勉さをもつ人々を起用して，その御業を行なわせ給い，今まで以上に教わったことを振り返って改革させ給うだけでなく，さらに一歩進んで，真理の発見に新しく輝かしい巨歩を踏み出すように仕向けられることはさらに真実である。

というのは，これこそ神がその教会を啓発なさる順序なのであり，我々の世俗的な眼が耐えうる程度に，徐々に神みずからの光を我々に分ち与えられるからである。神に選ばれたこれらの人々が，最初はどこで，どの場所から，語り始めるのか，これについて神は何の指図も制限も受けてはおられない。神は人間とは異なる物の見方，選び方をなさるのであり，我々が再び一定の場所や集会や表向きの聖職に帰依してしまい，ある時はウェストミンスター大聖堂内の古い宗教会議室に我々の信仰を置いたり，またある時はウェストミンスター大聖堂内の礼拝堂に我々の信仰を置いたりというようなことのないように配慮されるからなのである。なぜならば，そこでたとえ正統であると認められた信仰や宗教でも，はっきりとした説得力と辛抱強く導く慈悲の愛とがない限り，良心のわずかな傷をも癒すに足らず，また最もいやしいキリスト教徒をも，人間どうしの約束ごとの文字に従ってではなく，精霊に従って歩もうと願う者なら，これを教化することはできないからである。これはたとえそこで正統と認める賛成票がいかに多く投ぜられてもむだなことである。また，ヘンリー七世ご自身が，あたりに眠る一族郎党とともに，票数を増やそうとして地下から投票に加わったとしても同じことなのである。

また仮に，主要な教会分裂派と思われる人々が間違っているとしても，その人々がおだやかに会合し，おだやかに解散することを我々が許さず，かれらの言うことを寛大かつしばしば聞いてやって，問題を十分に討議吟味するということすらしないならば，それは我々の怠惰，わがまま，正義への不信が我々を引き止めているのだと言わねばならない。それはかれらのためでなくとも，我々自身のためになることではないか。カビ臭い旧説に飽き足らず，新しい見解をまとめて世に発表できる人々のおかげで，いろいろと恩恵を受けるものだという事は，いやしくも学問の味わいを知った者ならば，誰であれそれを認めないわけではないからだ。また仮に，かれらが我々の足元の埃や灰みみたいなものとしても，その思想において真理の武器を磨いて光らせるに役立つ特性のあるものであったならば，それだけでも全部を捨て去ってしまっただけではいけないのだ。しかしもしかれらが，特に現代に役立つ優れた豊かな才能に恵まれ，またおそらく聖職者でもパリサイ人でもないというのに，新しい危険な思想を持ち出すといけないというわけで，かれらを理解する前に憶断を下すという例のやり方で，我々が見境もなくその口を縛り上げてしまおうと決心するならば，これこそ我々にとって禍いなるかな，である。というのは，我々は福音を守ろうと考えながら，かえってその迫害者になってしまっているからである。

この長期議会が開会されて以来、長老教会に属する人々および属さない人々で、出版許可制を無視して無検閲の書物を出版し、これによって我々の心に張り巡らした三重の氷を叩き割り、人々に太陽を仰ぐ方法を教えた人々が少なからずあった。これらの人々は、束縛を無視することによってみずから大いなる功德を施したわけであるが、その同じ人々が、よもや今度はこの束縛を我々に押し付けるように説くことはあるまい、と私は希望するのだ。モーセが若いヨシュアを押しとどめ（民数記 11：27-29）、若いヨハネが無許可と思われる人々を禁止しようとした時、我が救世主がそれに反対の命令を下し給うたが（ルカによる福音書 9：49-50）、これはかれらの禁止しようとする性急な気持ちが、いかに神には受け入れがたいものであるかを示している。これをもってしても、我が国の長老たちは理解するところがないのであろうか。あるいはまた、検閲という妨害によって、どんな害悪が教会に満ちあふれたか、またかれら自身がこれを犯すことによって、どんな利益をかれらが見ようになったか、かれらはこれを記憶しているはずである。これをもってしても、我が国の長老たちが理解するところがなく異端審問裁判所の最もドミニコ修道会的な部分を我々に承服させてこれを実施し、すでに片足をあぶみにかけて積極的に弾圧に乗り出そうとするのであれば、これはとんでもないことであって、まず第一に弾圧者自身を抑圧することこそ公平な処置というものである。かれらは、最近の苦難の時代を経験しながらも少しも賢くなっておらず、かえって情勢の好転にすっかりのぼせ上がってしまったからである。

[¶ 26]

それから、印刷出版の規定に関しては、議員の皆さん自身がこの検閲令の一つ前に「いかなる書物も、出版者と著者の氏名、あるいは少なくとも出版者の氏名を登録しなければ、印刷出版してはならない。」という命令を出されたが、もはやそれ以上に適当な方法を皆さんに勧告する光栄をもとうなどとは、誰にも思わせてはならない。そしてこういう手続きを経ないで世に出たものは、もしそれが有害で誹謗的であることがわかれば、執行官に焼却させるなりしてしまうことが、取り締まり策として人間が用い得る最も時期を得た、最も効果的な治療法となるであろう。なぜならば、以上これまで私が述べたことが少しでも正しいとすれば、書籍検閲というこのたびの正真正銘のスペイン式政策こそ、実は最も許されざる書籍そのものであることがまもなく理解されるであろうし、またこれは、同じ趣旨のかの星室庁書籍検閲法令に生き写しであったからである。星室庁は、ちょうどその頃、他にもいろいろ敬虔な業績を行なったのであるが、その結果、ルシファー（Lucifer）といっしょに星々の世界から地上に転落してしまったのである。そこでこの検閲令が考案されるにあたり、一体どれほどに国家が慎重を期し、人々を愛し、宗教あるいは良俗に注意を払ったであろうか、ということが議員の皆さんにはご推察できらばでありましょう。もちろんかれらは、書物に過ちを犯させないためにこれを拘束するように装ってはいるが、これはとんでもない偽善なのである。これが非常によくできているこの前の命令をどうして打ち負かしたのであろうか。もし我々が、その職業柄、最もよく調べ上げている人々の言うことを信用してよければ、書籍販売の取引きの上で、幾人かの古い専売特許権所有者と独占商人の不正行為がそこにあつたのではないかという疑いがある。かれらはその仲間の貧しい人々が欺かれて権利を奪われることのないようにとか、各人がそれ

ぞれの版權を保有するのは当然であるという、誰も反対できないようなことにことよせて、いろいろともっともらしい口実を議會に持ち込んだのであるが、実のところそれは口実に過ぎず、隣人に対して優位を保とうとする目的にかなえばそれでよかつたのである。隣人とは學問を裨益する立派な職業に従事している人々であるが、それも決して他人の召使いになるために働いているわけではないのである。請願によってこの命令を獲得するにあたって、一部の連中が狙っていた目的が他にもう一つあるように思われる。それは、かれらが權力を手中にして悪質な（王党派の）書物をうまく世間に出してしまおうとすることであり、これは結果が示しているとおりである。

しかし、これらの商売上のごまかしやへりくつについては私は精通していない。私が知っているのは、良い政府にあつても悪い政府にあつても、過ちというものはほとんど平等にあり得るものであるということだ。というのは、いかなる為政者でも、誤つた報道を受けることがあるだろうし、もしも印刷出版の自由が少数の者の權力に握られてしまえば、ますますそのようになるであらうから。しかし、過ちを進んで、すみやかに改めること、最高權威の地位にありながらも、他の連中が贅沢な賄賂を尊重する以上に、率直な報告を尊重して聞くこと、これは、名譽ある兩院議員の諸君よ、皆さんの最高の高貴な行為にふさわしい徳であり、最も偉大かつ最も賢明な人々以外には与りえない美德なのである。

<本文終わり>

[以下につづく訳注は、紙幅のため次号に掲載の予定である]